

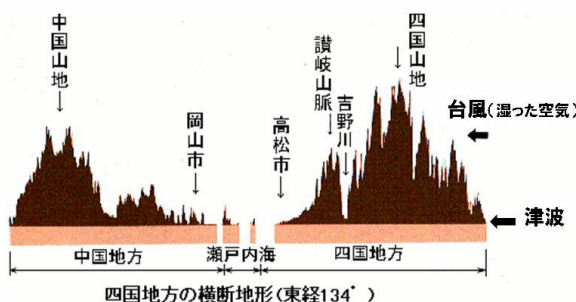
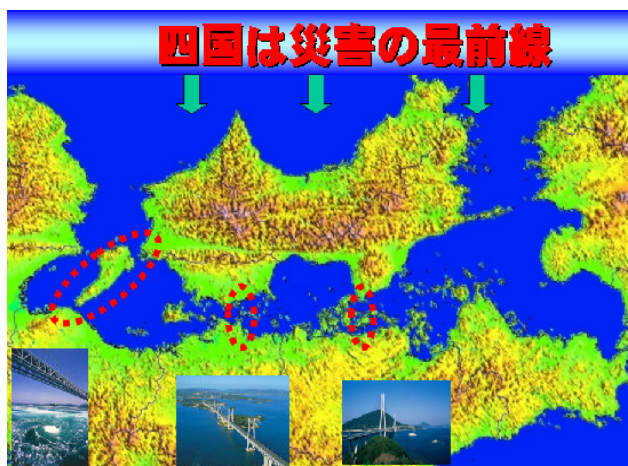
四国の防災文化、「しなやかさ」を活かす

四国地方防災エキスパート 松尾 裕治

四国は災害の最前線

四国は、「伊予之^{いよの}二名^{ふたな}島」の名で我が国最古の歴史書「古事記」に登場する時代から、「この島は身一つにして^{おも}面^{おも}四つ有り。面ごとに名有り」と記されて、四つの面は讃岐国、伊予国、阿波国、土佐国、「二名」は讃岐の飯依比古^{いひよりのひこ}と伊予の愛比売^{えひめ}、土佐の建依別^{たけよりわけ}と阿波の大宜都比売^{おおげつのひめ}の男女二神がそれぞれ一対となり、二つ並んで一の島を形成しているという意味です。この「二名島」は、現在の北四国（瀬戸内海側）と南四国（太平洋側）の姿を見事に言い当てています。また、雨が多い太平洋側と雨の少ない瀬戸内側の打って変わった気象特性、水害や洪水災害が起こる島であることを教えているといっても過言でないと思います。

南を上にした右の図で四国の姿をみると、太平洋に突き出た左に室戸岬と右に足摺岬、中央に扇状に大きな屏風のような山地を抱え、太平洋側の地域は南からやってくる台風の湿った空気により大雨が降る特性があります。また中央の山間部は東西方向に通る構造線に沿って脆弱な地質が分布し地すべりの危険箇所が集中するなど、土砂災害が発生しやすい地域です。さらに海岸部は、太平洋から襲ってくる津波被害を受けやすいリアス海岸地形になっています。一方、屏風の裏側の瀬戸内海地域は、打って変わってあまり雨が降らないため洪水が発生しやすい特性があります。現在、四国は瀬戸大橋など3ルートで本州と高速道路で結ばれ、本州の半島になって生活は便利になっています。しかし自然災害を誘引する四国の高い山やリアス海岸などの危険な地形は今も変わってはいません。南からやってくる私たちの生活を破壊する台風や津波などの自然外力(敵)と前線で戦っているという意味で、四国は災害最前線であるといえます。



防災文化の「しなやかなローテク技術」を活かす

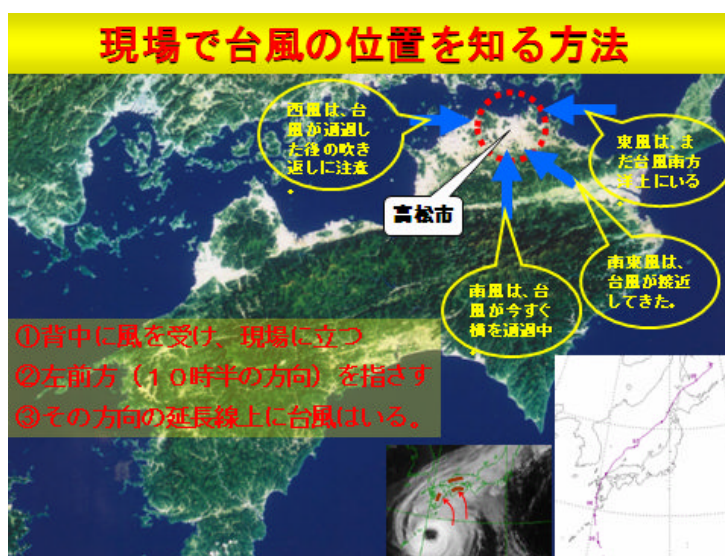
この災害最前線の四国には、災害から地域を守る防災文化が育まれています。この文化の潜在的知識(経験や勘に基づく知識のことで、言葉などで表現が難しいもの)を現在の家庭

や地域での使えるローテク技術として活用していくことも大事です。例えば、第19号で紹介したような「さぐり棒」のようなものが、そのローテク技術です。しかし、目の前に潜在的知識が存在していても、気づかないし、また、どのように使うのかわからないといったことで実際には、ほとんど活用されていないと思います。ローテク技術は、いったん自分のものにしてしまえば、手軽に災害時に体现できるものです。そこで、台風のシーズンが近づいていますので、台風に係るローテク技術を紹介したいと思います。

【現場で台風の位置を知る方法】

現場で、まず最初に、自分の背中に風を受けて現場に立ちます。そして向かって左前方、時計でいうと正面を12時とすると10時半の方向を指差します。その方向の延長線上に台風はいます。

私の郷土徳島では、昔から、台風のまぜの風（南東の風）が吹き出すと台風がすぐ近くまで来ていて、これからドンドン雨が強くなる。南風になると台風が近くを通過中で雨、風とも最も強いときである。台風は通過した後も吹き返しの西からの突風が吹くから気をつけよと教えられました。まさにこの教えは右図で説明できます。高松で考えますと、南東の風の頃は、進路図で考えると台風は九州の南まで来ています。西風になった頃は、既に台風は通過し阪神方面に進んでいることがわかります。この方法を活用すれば、テレビやラジオの台風情報がなくても、今後、降雨が

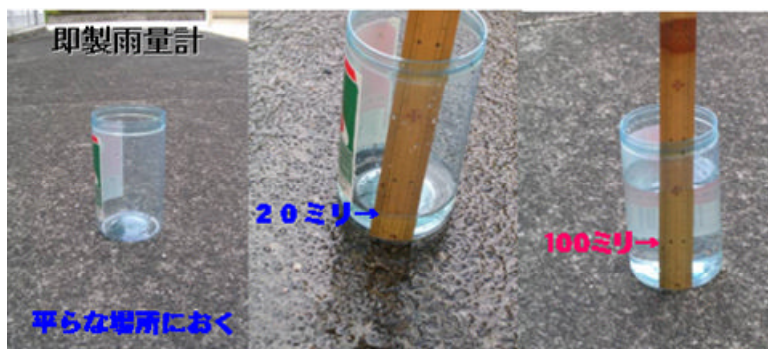


どの程度あるかを自分たちで予測し、水害に対処することができます。

【自分の家で雨量を量る方法】

また私たちは、情報を待つだけではなく自ら情報を取ることも大事であります。例えば、自宅で写真のような即製雨量計で、降雨量を量ることで危険を察知したり、避難する目安を得ることができます。

まず、右の写真の味付けのりの容器のような口の大きい円筒形の「空きびんや空き容器」を探し、降雨をさえぎらない平らなところにおく。一時間たったら容器にたまった水の深さを計る。2cmの深さに水がたまった場合、20mmの雨が降ったこととなります。一応の目安として高松では「一時間あ



たり 30 mm以上、雨が降り始めてからの合計が 70 mm以上は要警戒（洪水警報の発表基準）」です。中小河川の氾濫など重大な災害が起こるおそれが出てきます。県内でも地域ごとに注意、警戒を要する雨量の値は異なります。この基準は、気象台が大雨や洪水注意報、警報として過去の災害発生状況や気象条件との関係を調査して決めたものであり、従って香川県内でも高松地域、小豆島、東讃、中讃、西讃の地域別にそれぞれ発令基準が異なります。自分が住んでいる地域の注意報、警報の発表基準をホームページで調べ、気象台がテレビなどを通じて発表する実際の発令と自分が量った雨量と比べてみるのも、実際に危険の目安を知ること役に立ちます。

実際、災害には、防災機関などの防災情報発信者の情報伝達だけでは、災害時の住民避難の問題は解決しません。このような方法で住民の方が自ら情報を取ったり、予測したり、近所の人や消防団の方から身近な情報を入手して、危険を悟り自主的に避難することが必要な場合が多くあります。しかし、台風が接近した暴風時など、右の絵のような状況では、外への避難はかえって危険になります。災害の種類や地域の状況に応じて、逃げる方法やタイミングを判断することが必要です。



【シートと土嚢で浸水を防ぐ方法】

右の写真は、平成 19 年 8 月 6 日、6 時 33 分の高松市丸亀通りの写真です。私は、丁度この日、台風の防災体制を取るため、朝早く当時の職場に自転車で出勤していたところでした。その時、感心して撮影したものです。この日は、四国に台風 5 号が接近しており、平成 16 年の高潮を経験した商店街の方々が、高潮の浸水被害に備え、少しでも被害を小さくしようと、前日に土嚢とシートで商店の防水対策をしているものです。この方法は水が進入する側のドアと床の隙間をシートで覆い、その上に土嚢を置き重しとする方法です。水防工法のシート張り工を見事に応用した防水対策です。家屋の浸水を防止する方法として皆さんにも簡単に出来るものです。是非、土嚢とシートを用意し、皆さんの家屋の構造などに応じて玄関などに応用してください。



最後に、「天災は忘れたる頃来る」寺田寅彦の言葉のとおり、皆さんが実際に災害に遭遇するのは、災害を忘れた頃だと思えます。それまで、**空振りを嫌がらず長くこのような備えを継続していただくことが大事です。**そのためには、皆さんが四国の防災文化を勉強しながら、ローテク技術を体現できる人になっていただき、その姿やその成果を身近な人に見せ、**手軽に実践できるローテク技術を広めていくことが必要です。**